

二〇一四年八月二二日

稲の穂を風の翼が駆けめぐる  
筋雲のグラデーションや秋夕焼  
路地裏の戸毎に並ぶ涼み椅子  
海跨ぐ高速高架秋高し

みちほ

菜々

さつき

ひかり

二〇一四年八月二二日

惨状に祈るほかなし秋出水  
丘の上に散らばる牧馬うろこ雲  
漆黒に迫る前山星月夜  
溪流に半身浴の西瓜かな  
慈悲塔へ白粉花の綴る道  
溪空の風にあそべるとんぼかな  
参道のここがゲートや登山口  
蒲の穂の風にゆらぐも相寄らず

宏虎

みちほ

かず

せいじ

満天

ぼんこ

なつき

菜々

二〇一四年八月二〇日

雨晴れて夏日をはじく湖面かな  
試歩がてら郵便局まで秋日傘  
ニュース見て祈るばかりや水見舞  
黍の道熊注意告ぐ広報車  
天高し公園デビューせし稚児に

せいじ

はく子

なつき

ひさ野

菜々

二〇一四年八月一九日

川沿ひに傾ぐなぞへの松涼し

ひかり

老駒も草喰む牧の秋高し

みちほ

手の平に掬ひ早稲の穂存問す

雅流

みそつ齒の笑顔土産に帰省かな

有香

帰省子に不人気なりし夫のひげ

なつき

夙川の瀬に降り佇てる秋日傘

菜々

二〇一四年八月一八日

天の底抜けしごと雨台風裡  
帰省子の半年分の話聞く  
秋暑し捨て風呂釜の錆びにさび

うつぎ

満天

よし女

二〇一四年八月一七日

抽きんでしひまわり園の風車小屋  
放題の庭の雑草秋暑し  
黒船のごと船翳や星月夜  
よく食べることが大事と生身魂

あさこ

菜々

かず

三刀

二〇一四年八月一六日

去ぬ子らの尾灯滲ませ秋時雨  
耳なりのごとくに繁し蝉時雨  
墓守の背に群れて憑くあきつかな  
幼らを抱いて黙祷終戦忌

菜々

なつき

ぼんこ

ひさ野

毎日句会みのる選・二〇一四年八月二四日